

# 浪江町幾世橋地区

## 1 想定するモデルとしての姿、モデルとする事項

- 営農再開地域における水稲・大豆・飼料作物の複合経営体としての収益確保
- 水田・畑地における水稲・飼料作物との輪作体系の構築
- 震災後の作付再開ほ場における大豆の安定収量確保



## 2 生産概要（中心的な担い手の概要）

- 【作付面積】  
(R3) 水稲：20.0ha、なたね1.0ha  
(R5) 水稲：25.0ha、大豆：15.0ha、WCS用イネ：7.0ha、子実トウモロコシ：5.0ha
- 浪江町内でR2年度より営農再開後、R4年度から大豆栽培に取り組んでいる
- その他、R5年度よりWCS用イネや子実トウモロコシなど、飼料用作物の栽培にも広く取り組んでおり、幾世橋地区の中心的な担い手組織

## 3 取組のポイント（モデルとして構築する取組）

### <需要に応じた生産の取組>

- 主要な出荷先であるJAで要望されている大豆品種「里のほほえみ」を水田・畑地で栽培

### <導入した農業機械、営農技術>

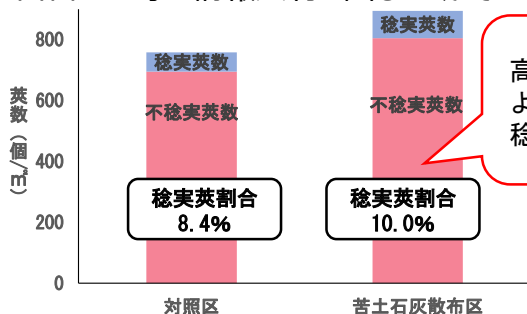
- 営農再開支援事業の活用により、汎用コンバイン、ブームスプレーヤー等を導入
- 震災後、管理耕作を行っていた水田ほ場の無肥料栽培区と、土壌改良資材として苦土石灰を施用した区における生育状況・収量の比較を実施



## 4 取組成果

### <管内における大規模大豆作付と、関係機関との連携体制構築>

- R5年度、浪江町内の生産者として唯一、水田・畑地で計15.0haの大豆を栽培し、播種・中耕培土・病害虫防除等の作業を適期に実施することができた。
- 今年度は7月以降の高温少雨の気象条件により、着莢不良、子実の肥大不良が広範で発生したが、町・JA担当者らと連携して現地巡回を実施し、収穫可能ほ場の判定と、青立ち大豆の刈り取り時期の目合わせ等の情報共有を図ることができた。



高温多照の影響により、全体的に不稔実莢が多く発生



## 5 課題（6年度のポイント）

- 高温年の収量確保を図るための栽培条件（播種時期、施肥管理、畦間灌水等）の検討
- 飼料用作物と大豆のローテーション確立